萬葉拾穂抄　十八

4032 4033

萬葉集巻第十八

天平二十年春三月二十三日左大臣橘家之使者造酒司令史田邊福麻呂饗于守大伴宿祢家持舘爰作新歌并誦古詠各述心緒四首

田邊史福麻呂

奈古のうみにふねしはしかせおきにいでゝ
なみたちくやと見てかへりこん

なみたてば奈古のうらはによるかひの
まなきこひにぞとしはへにける

左大臣橘家 諸兄也
家持ハ越中守なる
程に橘家より使者
を國府へつかはさ
るゝなるべし
誦古詠 故ある古き
詠物なとせしなるべし
なこの海に舟しまし
仙田志のしはしにかはりて
同韻なるを故ある
しはしといふやうに
きこゆるや
なみたてハ奈古乃
序なれバ心ハ戀の為に
て家持をさしたる

4034 4035 4036

奈古乃うみにしほ之保のはやひばあさりしに
いでんとたづはいまぞなくなる

ほとゝぎすいとふときなしあやめぐさ
かづらにせん日こゆなきわたれ

于時期之明日将遊覧布勢水海仍述懐各作歌八首

田邊史福麻呂

いかにある伊可尓安流布勢世のうら宇良ぞもこゝだくに
きみ吉民がみせんとわれ和礼をとゞむる

守大伴宿祢家持

し心なるべし
奈古乃海ハ潮の干ては
杉の鶴なきさわぐ
し干潟に求食んとて
鄕にいふなるべし
いとふ時なしハ端午
菖蒲かづらせん日ハ
よりなきわたれとぞ
期 ちぎりし日 明日
布勢の湖見せんと契
約せしこと
いかにある布勢の浦ぞ
いかなる景氣なれば
我をかくとゞむるぞや
君がみせんと頻
にのぞみたまふぞと

をふの浦こきたとし
仙覚をふのさき、越中
玉葉云見るともあく
へきハ見あくましきをいふ
きの心し

玉くしけいつしかあけん
玉匣ハあけんといはん枕
詞いつしか明ハあけんお
けハ浦の玉藻ひろハむ
むとひろハんに拾へ

音のミにきゝてめに
見すハ上京もせしと

布勢の浦を行てし
かたりつきてんとハ
語り傳んとも

4037 をふのさきこきたもとほりひねもすに（平敷 佐吉 多母等保里）
見るともあくへきうらにあらなくに
一云　きみかとはすも

田邊史福麻呂

4038 たまくしけいつしかあけん布勢のうみの（宇美）
うらをゆきつゝたまもひりハん（比利）

4039 おとのみにきゝて目に見ぬ布勢のうらを（於等 布勢宇良）
見すハのほらしとしハへぬとも（等之）

4040 布勢のうらをゆきてし見てハもゝしきの
おほミやひとにかたりつきてん

うめの花さきちる
家持より使を待
ゆえにや

ふちなみの咲ゆくをみれハ
心明し

あすの日の布勢のうらみ
そハ期之明日将遊覧
布勢水海とおもひて
よめるなり心明
明日ゆきて見ん布
勢の浦ふちの盖
来鳴とハ郭公の
国にハ猶不来鳴ねし
さりとし　一云郭公
そこもよくきこゆ　一
頭ニ云一本のみなる

4041 うめのはなさきちるそのにわれゆかん（宇梅 能波奈 曽能）
きみかつかひをかたまちかてら

4042 ふちなみのさきゆくみれハほとゝきす（敷治奈美）
なくへきときにちかつきにけり

和スル歌　大伴宿禰家持

4043 あすのひのふせのうらみのふちなみに
けたしきなかすちらしてんかも
一云　ほとゝきす

二十五日往布勢水海道中馬上口號歌二首　大伴宿禰家持

4044
はまへよりわかうちゆかハうみへより
むかへもこぬかあまのつりふね

4045
おきへよりみちくるしほのいやましに
あかもふきみかみふねかもかれ

垂氷邊遊覧之時各述懐歌　六首（一至水海）

田邊史福麻呂

4046
かんさふるたるひめのさきこきめくり
みれともあかすいかにわれせん

（多流比女能佐吉）

遊行女婦土師

4047
たるひめのうらをこきつゝけふの日ハ
たのしくあそへいひつきにせん

（多流比賣宇良）

大伴家持

4048
たるひめのうらをこくふねかちまにも
ならのわきへをわすれておもへや

田邊史福麻呂

4049
おろかにそわれハおもひしをふのうらの
ありそのめくりみれとあかすけり

（乎不乃宇良　安利蘇野米具利）

掾久米朝臣廣縄

4050
めつらしききみかきまさはなけといひし
やまほとゝきすなにかきなかぬ

はまへよりわかうちゆかハ
心明く
おきへよりみちくる
沖よりみちくありをふハ
我おもふ君の御舟か彼
かれハ我おもふ人の御舟
かもと上の句いやまし
に我おもふといふ詞也
かんさふるたるひめの
仙田たるひめの崎
越中
遊行女婦　土師
遊君なり　土師ハ
姓也
たるひめのうらを
いひつきにせんとハ
ほまれのいひつたへにす
るにせんと也橘家の使
を玉へるをさとしてそ
遊興のたのしみ也これ
てこそ楽みを述る也や
たるひめの浦をこく舟
かちまにハ梶間に梶とる
間も也袖中抄云あるの
わきへといふハ家のわかへ
といふこれを略してわ
いへといふこれをわきへと云
あしき也假て家字吾
家といふ字をわいへん
とよむ下略
おろかにそ我ハおもひし
えぬれとハおろかに

4051　4052　4053　4054　4055　4056

ゐひしにんてハおり
さかりなりとく
まつしきこえありまき
福麿にあいさつて
こゝ乃詠は蓋し乃に
多胡乃崎ハ越中也
志はかハ志かきりかし
此蓋志きりよまきこと
よまハ久藤のしきこと
此とおと同意し
ほとゝきすいまなかす
久かの宴會におゐん
こゝわいちゝめ上京の
山路にて獨きらんハ
なく共しるしあらし
此蓋ま成ぬる故を

大伴宿祢家持

たこのさきこのくれしけにほとゝきすきなきとよめははたこひめやも

（多胡乃佐伎　久礼之氣尓）

掾久米朝臣廣縄之館饗田邊史福麻呂宴歌四首　田邊史福麻呂

ほとゝきすいまなかすしてあすこえんやまになくともしるしあらめや

久米朝臣廣縄

このくれになりぬるものをほとゝきすなにかきなかぬきみにあへるとき

此日ハ福丸上京の名
おの蓋ま成ぬる故を
いふてあかぬねかふ福
丸に糸を乃附なはと
おもてきこすこのよ鳴流れ
祇日ニてあきされハ
今夜之ほくたまへ
へと六月残におもて云
帰る日也をなれ日ハ
仙日いつはたの坂越前
越お坐へこゆる小二乃
ふるふいつりこしを
すらうへ出きのへてを
鶴賀へ出る之まの越ハ
袖にさのしき之東口
つまハ帰るさし

大伴宿祢家持

ほとゝきすこよなきわたれともしひをつくよになそへそのかけもみん

（許欲　都久欲尓奈蘇倍）

かへるみのみちゆかん日はいつはたのさかにそてふれわれをしおもはゝ

（伊都波多野　佐加）

太上皇（清足姫天皇也）御在於難波宮之時
歌七首（田邊史福麻呂傳誦之）
御船泝江遊宴日奏歌四首

左大臣橘宿祢

ほりえにはたましかましをおほきみをみふねこかんとかねてしりせは

（保里　多麻　大皇乎）

大上皇　元正天皇也
此より福丸傳誦の也
注にこゆる天平廿年
の此比乃事にいはす
元正帝ハ天平廿年四月
崩ましましたれハまたのす
を福丸かいひしまゝに
こゝにかき入られたるし

みふねこかんとかねてしりせは

和歌　御製

たましかすきみかくいていふほりえには
たましきみてゝつきてかよはむ　一云　たまこきしきて
たえずてかよはん

おりにはおほやけしを　此哥　諸本大皇乎ミ天之續千載集にはおほきみの
とのたまへる祇注の本をし　のこらむて改れ　祇曰おほきみのみふねをハ太
上天皇乃おほやけより奈良の心なり
しるしまさずまろうる　彼諸兄公の玉しきましをと詠るハ玉しきて悔る
心あれハ此御製にハ君がくいていふとよませ給へり　御心ハ文玉敷て
かりしもきんこと
ほりえよりみをひき
此哥次の哥も本ニ月

作者未詳

ほりえよりみをひきしつゝみふねさゝと

終て宴するハゆんとふ
あれ下にはり
おりよりみをひきの河をいふ
竟宴於云みをひき
こハ水尾引しとちつゝを
いふやまきちもとぞ
云々の深きをや水尾
と云浅瀬ハ舟行るる
二れハモ東門をせさし
文のきいぞふうくしまれ
陸にあらさらくしまれ
ハ河邊を舟をまれゆく
しちつるのとをすの橋
又安云ぞゆり
橋をえ調するを
云し釆葉云とも

しつのをのとものハかはの瀬申せ

なつのよハみちたつ／＼しふねにのり
かはのせことにさをさしのほれ

在於左大臣橘卿之宅肆宴御歌

御製

たちはなのとをのたちはなやつよにも
あれハわすれしこのたちはなを

河内女王

たちはなのしたてるにはにとのたてゝ
佐可弥豆伎伊麻須わかおほきみかも

4060

橘とハ常世の物なりとハいふ也　日本紀六垂仁曰九十年春二月庚子朔天皇命田道間守遣常世國令求非時香菓今謂橘是也　又九十九年秋七月天皇崩明年春三月田道間守至自常世國則齎物非時香菓八竿八縵

よろつ代乃みつきてゐる海所祇曰橘乃宿祢乃ゑありけれハ　さかみつきるゝます
とハ酒乃御調酘也　仙曰さかみつきとハおほきみにまゐる御酒宴也
又安云さかくらほきまつるます也　又東祇仙ハ酒ほかひと須し　又安云ハ業
心とりあり一説不好　八雲抄おもふ雖波家ハ橘諸兄公家也　又東よめるを
てとハ此橘家也や

粟田女王

つきまちていへにハゆかんわかさせる
あからたちはなかけにみえつゝ

月待て家にハゆかん　又安云行りし橘ハ赤き
橘也　又東橘の月影に
あからさまに見えつゝ面白くれ
ハ月待て橘家よりゆ
くとし　我さかせるとハ
とこよの物此橘の
八雲おもふとことおもふ

4063

後追和橘歌二首

大伴宿祢家持

とこよものこのたちはなのいやてりに

わかおほきみハいまもみることと

常世物なれる橘をいへり
橘なれハ橘をいへり
いやてりにわか大君ハ
栄えのまします　童蒙抄同

4064

おほきみハときハにまさんたちはなの

とのゝたちはなひたてりにして

おほきみハときはにまさん
橘の殿の橘とハ橘家
諸兄公の庭の橘也
ひたてりハ一向照（ヒタステル）也

題射水郡驛館屋柱歌一首

山上臣　名未詳或云憶良大夫之男

4065

あさひらきいりえこくなるかちのおとの

つはらつはらにわきへしおもほゆ

あさひらきハ入江こく
仙はりくハかとハ
つはらつはらに　米家同安同説
席委くわきへしの
しも卿字也我家
乃家をおもふこと

四月一日掾久米朝臣廣縄之舘宴歌四首

守大伴宿祢家持

4066

うのはなのさくつきたちぬほとゝきす

うの花さく月
ほとゝきすとハ含也

うのはなの
字能

みむとこれかみかり
ふゝミ之意ニれを
卯花未開の時と
いふ也一説ハ郡の掃
イ かてとこあり不用
ふたかみの山にこもれる
君ハ家持を云也
をりあかしこよひ
イラリアカシモ
平里安加之母とよぶ
用ゆのやんとハこひ
のまんとハいこるとのむ
とふ郷の主をあらわ
さんけすハ立夏な
まそ必ゆなんとて
二日應し将の喧
あすよりハつきて

きなきとよめよふゝみたりとも　敷布義ハ里不用

遊行女婦土師

4067 ふたかみのやまにこもれるほとゝぎす
いまもなかぬかきみにきかせん

大伴宿祢家持

4068 をりあかしこよひはのまんほとゝぎす　乎里安加之　許余比
あけんあしたはなきわたらんぞ

二月謂之應立夏節故謂之明旦將喧也
羽咋郡擬主帳能登臣乙美

4069 あすよりはつきてきこえんほとゝぎす

仙回一夜のうちにハ一夜
の名ぬ之重集鳴にも
立夏されハつきて鳴
つき郷むを一夜の鳴
りに忘れてまよく
作者擬主帳とハ郡司ホ
大領少領主帳主典をと
國司の四分の如し擬主
帳ハ文章生擬生の如し
ひともとのなてしこ
植えんとおもひそめて
こころへれとのき
郡司　郡乃ながる
しなさかるこしの
イ 故之能吉美能等
とゆう不用く　しなさかる

ひとよのからにこひわたるかも

先國師從僧清見欲入京設飲饌饗宴時詠庭中牛麥花歌一首　イ從僧ニ用ん

主人大伴家持

4070 ひともとのなでしこうへしそのこゝろ　比登母等　奈泥之故　許已呂
たれにみせんとおもひそめけん

郡司已下子弟已上諸人多集此會因作此歌一首

4071 しなさかるこしのきみらとかくしこそ　故之能吉美良等

守大伴宿祢家持

4072

るおほこらみなそこる
之越中人ことゝ云安
云やまさかつきこハまた
柳を葛蔓とも作るハ不
乃奇也丑栗梁塵
秘抄ふある但師説かれた
らきさハかつらにせし也
かつらきもよめり
因テ屬スルニ目ニ 月のこゆる越へ
ぬえしものよ渡る
いくよふとハあそ
て隔て幾夜をさ
ると也かそへて云
越前國掾池主へおめ
越中ノ掾也今任越前ニ
望テ拜ス彼北方ニ 越より

やなきかつらきたのしくあそはめ

此夕月光遅流和風稍扇 即
因テ屬スルニ目ニ聊作ル此歌一首ヲ

大伴宿祢家持

ぬえしものよわたるつきをいくよふと
よみつゝいもハわれまつらんそ

三月十五日贈ル越中國守大伴宿祢
家持ニ歌三首 越前國掾大伴宿祢池主

以テ今月十四日到リ來テ深見村ニ望ミ拜ス彼
北方ヲ常ニ念フ芳德ヲ何ノ日カ能ク休マン兼テハ以テ隣近ヲ

4073

北方ハ越中也
常ニ念フ芳徳ヲ 家持の君達
をおもふりやむ時なし
こと
以テ隣近ヲ 國もちかきね
ハ忽不意に心を通る
促ス膝ヲ未タ期 あゆみをも
こひて逢ミんすへ
とあしと也 丈復何
言ふをいもんあか
あしと 臨紙悽断
をりふ逃て なかて
心のゆくにりすと云
月されハおもしろし
月をみつ 遊ふ
よわ を歌し

忽ニ増ス戀ヲ加以先書ニ云暮春可シ惜ム促ス
膝ヲ未タ期セ生別悲シ兮丈復何ヲカ言ン臨ンテ紙ニ
悽断奉ス状不備

古人云

月みれハおなしくになりやまこそハ
きみかあたりをへたてたりけれ

4074

屬テ物ニ發ス思ヲ

雖ニ人云

桜花今そ盛とひとハいへと
我ハさふしもきみとしあらねハ

所心歌 一ニ首ノ字ナシ

屬物發思　景物に逢て懐を
櫻花今さかりなると
君と同じ心の便ありて
いはずともしるべしと也
所心歌　凡姿を心中に思
ふ事を讀しと云也
かひなくすぐすかなしさん
隔たる遠の越國の
我やよみし人の同じく
けふを隔つる中や
あしひきの山はなくもが
山ニてハ君をへだてを
へだつれ山なき月ハ
いつも照せハ同じ里の心
するを山にへだてゝ二人
へだつれハ山なく

あひおもはずあるらんきみをあやしくも
なげきわたるか　ひとのとふまで

三月十六日報越前國掾大伴宿祢池主歌四首　守大伴家持

答古人云

あしひきのやまはなくもがつきみれば
おなじきさとをこゝろへだてつ

答屬目發思兼詠云遷任舊宅西北隅櫻樹

わがせこがふるきかきつのさくらばな

もとの家をさし
遷任舊宅　池主は越中掾
の時の宅也桜を云
て今は國を人にしてそ
よみけるなり
わがせこがふるき垣内の
垣ほのほ内をいふ也よ
たゞさかりなるを云にこそ
こふといふハえも名つけ
人をこふるをこふといふ名
ハ古人名付たり我が
吾身の思ひハ言ひかたきは
すべもなきとあさましき也
三嶋野に霞棚びき
三嶋野　越中也
けふ人のこふといひけんハ

いまだふゝめりひとめみにこね

答所心即以古人之跡代今日之意

こふといふはえもなづけたりいふすべの
たつきもなきはあがみなりけり

更矚目

みしまのにかすみたなびきしかすがに
きのふもけふもゆきはふりつゝ
（蒭之麻　可須美　由伎）

來贈越中守大伴宿祢家持歌二首　姑大伴氏坂上郎女

常人のこふよりハあまりて
乃るすにしぬべく成
よりとしにハ助字也
かたおもひをうまにふつまに
ふつまとハ兄安云夫
馬まやらに但師流ハ
かよるし太く〳〵して
ちさき馬にもりひのすき
といへんそてしにこて
ハ越急之人りきつんと
ハ今のりとしさんとが
とき物ハ盗人あくれ
へき故にかくいへるし
あまさかるひなの歌に
仙曰諸國乃田舎を云
まるての説なれバ

4080
つねひとのこふといふよりハあまりにて
われハしぬべくなりにたらずや

4081
かたおもひをうまにふつまにおほせもて（宇萬尓　布都麻尓）
こしべにやらばひとかたはんかも（可多波牟）

報歌并所心歌三首
越中守大伴宿祢家持

4082
あまさかるひなのやつこにあまひとし（比奈能　都夜故　安未比度）
かくこひすらばいけるしるしあり

4083
つねのこひいまだやまぬにみやこより
うまにこひこばになひあへんかも

兄安云府中ゟ云之あめひとしハ天人也仙曰家持ヵ姑坂上郎女と
賞する詞也かく恋すらハといふハかく恋すれハと云し都夜故或ハし
ツヤコとよむ有　都夜故ミヤコとよむハ破丈利楊奈疑の和あれ
つねのこひいまださ　うまにこひこハとハ郎女かよするみつよりおゝせ
とてとよめるをうけてかくるにおほせて恋まてハ我か常の恋
うへしに荷ひ合んと
別所心　別ハ外かし
あかとき〻になのれり
只行也都云と曉に
まけハ形詠詠とき

天平感寳元年
續日本紀十七曰天平廿
一年二月陸奥國始貢
黄金四月丁未改天平
廿一年為天平感寳
元年中略金をまる

別所心

4084
あかときになのりなくなるほとゝぎす
いやめつらしくおもほゆるかも

天平感寳元年五月五日饗東大
寺占墾地使僧平榮等時贈酒歌
一首
守大伴宿祢家持

4085
やきたちをとなみのせきにあすよりハ（夜伎多知　乎刀奈美　勢伎）

4086　4087　4088　4089

故感寶と改元ありし
ゆゑを天平勝寶には
東大寺聖武帝建立
やきたちをとなみの
焼太刀を利きといへん
淵源しとなみの関へも
此郡の中にとありへ
関の名数あり慕従ふ
諸僚守以下の友人之
ともし火の光りみゆる
二句まゝ其の具か
又よし縵つくりて百
合花の笑みをよそへて
また風流なるかつら
ゆりとかけて
ともし火のまへ

もりへやりそへきみをとゝめん

五月九日諸僚會少目秦伊美吉石竹之舘宴時主人造百合花縵三枚疊置豆器捧贈賓客各賦此縵作歌三首

守大伴宿祢家持

ともしびのひかりにみゆるわかかつら
さゆりのはなのゑまはしきかも

以内藏伊美吉繩麻呂

ともしびのひかりにみゆるさゆりはな
ゆりもあはんとおもひそめてき

ことの具を上らる
古し序あり ゆりも
ありんとハ動きあれて
名めてうるはしや
さゆりなるかし
ゐるまハ縵也かあ
りんとそつけてしの讃
なもうるくれ
ことゆりもあはんと
小木分しの戯風なし
なるとかおひつきと
日本紀十五ニ登天下之位
とありし續日本紀十七天
平感寶元年四月の宣
命に天皇御世〻〻天ツ
日嗣高御座止坐氐治メ

和歌　大伴宿祢家持

さゆりはなゆりもあはんとおもへこそ
いまのまさかもうるはしみすれ

五月十日獨居幄裏遙聞霍公鳥喧作歌一首并短歌

大伴宿祢家持

たかみくら（御座）あまのひつき（安麻能日繼）と
すめろき（須賣呂伎）のかみのみことのきこしをすくに（久尓）のまほらに
山をしもさはにおほみと百とりの
きゐてなくこゑはるされはきゝのかなしも

いつれをかわきてしのはむうの花のさく　宇能
月たてはめつらしくなくほとゝきす　鳴
あやめくさたまぬくまでにひるくらし　珠　久良之
よわたしきけときくごとにこゝろ　登里
うごきてうちなげきあはれのとり　都具枳歟
といはぬときなし

賜比恵賜来流（タビヱタビケル）この歌は
何よりも高御座天
子の位につき（ツギ）給ふ御座に
天は日継とハ日神の御
統を継（ツガ）せ給ふ也　寶祚（アマツヒツギ）
すめろきみことのみことそ
帝をあかめる詞也
きこしをす　知ろし召之　見安云
国のまほら　見安云
乃ちかく五東山を
国のまほらなれハ云　さはにおほみと　山ハおほしとて百鳥のきて鳴
とハいはおほしハ重詞　きゐの囀も見安云　きてくる乃異とは
五東山とハ山おほくて百鳥鳴を云　此次の郭公をよまんとてこそし
ひるくらし　見安云　月影しても　よわたし　見安云　夜をあかす也
こゝろつごきて　見安云　心うごきてなし　仙覚ハ心付てこゝろつきとも　通
うちなげき　讃嘆する也　すべての百鳥もいれとふて郭公を賞するなるへし

反歌

4090
ゆくへなくありわたるともほとゝきす
なきしわたらはかくやしのはん

4091
宇の花のともにしなけはほとゝきす　朋
いやめつらしも名のりなくなへ

4092
保等登藝須（ホトトキス）いとねたけくは橘の
花ちるときにきなきとよむる

ゆくへなくありわたるとも
郭公ハ鳴て行来鶴
おこしうちありきさハいきと
もしこゝろしすあらハ
かくやハ慈思ふこと
あるまし故慈思子こそ
宇の花のさく
郭公ハかならず来鳴と
吾名を鳴故名のり鳴
と云也　おくさハ
物の珍しき名のりなく
ゆく珍めつらしもとを
保等登藝須いとねたき
ねたくハねたましき
橘の盛ハ来なで花散時
鳴動むを妬む心也

4093
行英遠浦（ユクアヲノウラ）之日作歌一首
大伴宿祢家持
安平能宇良
あをのうらによするしらなみいやましに

4094

あをの浦によする白波
何その浦ハ越中
ここにしてしきしきよせ
くとハ立頻寄来之
あゆをいたみかもハ東風
を痛て立しきよするとなり

たちしきよせく あゆをいたみかも（之伎 與世久）

賀陸奥國出金詔書歌一首并短歌
天平感寶元年五月十二日於越中國守舘作之
大伴宿禰家持

葦原の みつほの國を あまくたり
賀陸奥國出金詔書歌
續日本紀十七曰天平廿一年二月陸奥國始貢黄金四月陸奥守従三位百濟王敬福貢黄金九百兩云々 詔書ニハ四月朔日聖武帝東大寺に行幸して盧舎那佛の前殿におはして左大臣諸兄公に勅して佛にまをさしめ給へりし宣命のことを此詔の此歌の終りにも有
葦原乃水穂の國 此國の名也 あまくたりしらし 治メタマヒシ

しらしめしける すめろきの 神の命の
御代かさね あまの日つきと しらし
くる君の御代々々 しきませる

すめろきの神の命 是ハ天孫瓊々杵尊此國にくたり給ひしより以来を讃也
彦火出見尊やはしまの御子の御代をかさねてしらすと讃也
しきませるよもの國
おさめ給ふ四方の國也
ひろみあつみと 廣く厚く
御調物 國々
奉る調物也
尽くしかねつ也

よもの國ハ 山河を ひろみあつみと
たてまつる 御調寶ハ かそへえす
つくしもかねつ しかれとも わか大王の
もろひとを いさなひ給ひ よきことを
はしめ給ひて こかねかも
もろ人をいさなひ給ひ
よきことをはしめ給ひて
天子の仁をもとめ給ふ
を始め給ふ万民の君に
なる也 堯舜帥天下以仁而民従之乃心也
こかねかもといふ
民家に家富なんことを祈て
たしけくあらむと おもほして したなやますに
とりかなく あつまの國の みちのくの
小田なる山に こかねありと

あつまのくにのみちのくの小田なる　彼宣乃詔ニ高天原ニ天降坐之天皇御世平始天中今ニ至麻氐ニ天皇御世々々天日嗣高御座止坐氐治賜比恵賜來流食國天下乃業止奈母神奈我良母所念行久止宣大命乎衆聞食宣ト云ニ又曰東方陸奥國乃小田郡ニ金出在止奏氐進礼利續日本紀ニ委上下畧シテ注之　よろしきれと八ゝくれいて

天地乃神あひうつなひ
仙曰天神地祇之あひうつなひハおもむきて
受業現為現形の也
みたまたすけて
まさき代はかゝりけり
す御世をさかえて
天皇乃志てさかやま
おほみかやうのおす
ゑうしと日本紀ニ推古天皇十三年高麗國ノ大興王聞テ日本國ノ天皇造ルト佛像ヲ貢上黃金三百兩ヲ云云　聖武帝也東大寺の大佛造らせ給ふ時奥州より金を貢せしとなる
御代の始りてと謂り
をすくに　帝の知召國を云
かんながらおもほしめし　彼宣ニ神奈我良母所念行久ニあるは帝の御心の盛へし
まつろへのむけのまにまに　仙曰まつろへとは順る也むけとは平ぐる也
めのわらはこ　又安云め
わらはこ　古ク往ノ仙ハ

まうしたまへれ御心をあきらめたまひ天地乃神あひうつなひすめろきのみたまたすけて遠き代にかゝりしことをわがみよ（朕御世）にあらはしてあれはをすくに（御食國）はさかえんものとかんながらおもほしめしてもののふのやそとものを（八十伴雄）まつろへのむけのまにまにおい人もめのわらはこども（女童兒）しがねがふ（之我願）こゝろだらひ（太良比）になでたまひ（賜）治めたまへはこゝをしもあやにたふとみうれしけくいよゝおもひて大伴のとほつかむおや（遠都祖）のそのなをばおほくめぬし（大來目主）とおひもちてつかへしつかさ（官）うみゆかば（行者）みづく（美都久）かばね（屍）山ゆかば（行者）草むす（牟須）かばね（屍）おほきみ（大皇）のへ（邊）にこそしなめかへりみ（米見）はせじ（勢自）とことだてますらお（大夫）のきよきそのなをいにしへ（彼）ゆいま

仙曰まうとはいはれと云祖
心なりといふは 兄安云心乃
ますにしたかひかいふは
帝王の人と慎とゆうと
ころをもしあやふからず
此所心を貴とそこ
大伴乃まつ神おやの
ことのをは大ま同じと
おひ持く ことごとに負

乃をつゝに なかさへる おやの子どもそ
大伴と さへきの氏は 人のおやの たつる
ことだて 人の子は おやの名たゝす
大君に まつろふものと いひつげる こ
とのつかさそ 梓弓 手にとりもちて
つるぎたち こしにとりはき

又し日本紀二曰大伴連
遠祖天忍日命帥來目部遠祖天櫰津大來目とこ是ハ大伴と大來目とハ
本一流なりみな 天孫降臨のときみさきまちしかもし
海ゆかハみつくかはね 右潰屍也 是乃こゝろは身をすてて海に
ハかはに死し山ゆかハ山に死なん事を身をすてうけばすてゝ此語を彼宣
命とうつせり彼宣云又大伴佐伯宿祢波常母云久天皇朝守仕
奉事顧奈流人等尓阿礼波汝多知乃祖止母乃云來久海行波美豆久
屍山行波草牟須屍王乃弊尓去曽死米能杼尓波不死止云來流人
等止奈毋聞召 仙按みるに大伴ハ家持の姓なれハ元ふるとをいふ
へよここと死るや 兄安云へハそれをのをしへゆたかなり
をつ死るや 兄安云現し あらさる兄安云流し傳るし 丑家清き名を傳る心
大伴とさへきの氏ハ彼宣ニ大伴佐伯宿祢波と傳る習なりし
人乃おやのたつるそしおほ大君乃へにこそしなめかへりみハせしとこと
いそことはいし首尾之如く忠節のことゝしそこ
人の子ハおやの名たゝす 祖乃忠節此名を子孫にて絶さずと
身をもてしなをこれ又母乃名をあらはさむ孝也と孝
経よりいつる也や

あさまもり ゆふのまもりに 大きみ
麞毛利 王
のみかどの まもり われをおきて
三門
また人は あらじと いやたて
且
おもひし まさる 大皇の 御言の
大皇 御言

名夕のもり儀と云也
まもるハおもしといやそ
我あらしといふ人ハあらし
と咏るをもそこし
よの字下に付へし
此等恢安良之 等伊夜多氐 多氐

おもひしまさる 弥忠義
とおもひ増ぞし ハ助字也
おほきみのみことのさき
御ミことのさきこそ
帝乃さいはいをいふ
なり 是東大伴佐伯を
わきてのたまはせし御
詔の幸をさしてと也
一云 貴くしあれハ 同
ますらをの心おもほゆ
大丈夫の忠節を立
る心のおもほゆると
おほとものとほつかんおや
大伴氏の遠祖の廟を
世にいちしるくしるせ
てよ人乃見知やうにと

左吉 さきの 一云乎 聞者貴 きけハとうとミ 一云貴久之安礼婆

反歌

4095

大夫 ますらをのこゝろおもほゆおほきみの 佐吉 みことのさきを 一云能 きけハたふとミ 一云貴久之安礼婆

4096

大伴 おほとものとほつかんおやのおくつきハ 於久都奇
しるくしめたてひとのしるへく 之米 多氐

4097

すめろきのみよさかえんとあつまなる 御代 奈流
みちのくやまにこかねはなさく 金 花

為幸(ミユキ)行芳野離宮之時儲作(ミウケツクル)歌一首

也 遠神祖(トホツカミオヤ) おやもとの
詞し 奥槨(ヲクツキ)ハ廟也 おき
すめろきのみよ栄む
此しし哥ハ我云是
みちの年号を感宝の
二字をそへられ作り
しろしめされ 日嗣
る高御座ハ天子乃御座
やよりて天乃日嗣と
おほせつけたり
おもむいて 吉野の宮
とこそ始めつるし
さきとめまするも同
とのかつるとのゝ名が
其名のゝ名におもて為
いま春に行しる

4098

并短歌 大伴宿祢家持

たかミくらあまのひつきとあめのした 安麻 日嗣 天下
しらしめしけるすめろきのかミのミこと 志良之 賣師
乃かしこくもはしめたまひてたふ
とくもさためたまへるみよしのゝこの
おほみやにありかよひめしたまふらし
ものゝふ乃やそとものをもおのかおへる 毛能乃敷
おのか名おひおほきミのまけ乃 於能我 名負 名負 大王
まに〱此河のたゆることなく 麻久 多由流
此山乃いやつきつきにかくしこそ 伊夜 都藝

4099

あくれたまふを

みけのまうく 足安

云ゝあすゝ足 万葉こそ

方人ふたゝ騰をまつる世

なるこそ伊ふに限らい

ての足に河の縁さる

ことゝ山の汚くなる

如く嘉ちた佐んこと

いにしへを思ほすらし

仙田なりきめぐりよすに

限りなきいまする云同るすと

反歌

いにしへをおもほすらしわがおほきみ　和期於保伎美

よしのゝみやをありがよひめす

4100

もののふのやそ氏人もよしの河

たゆることなくつかへつゝみん

初春よろし五足ころ古をおもひしめすらん今の聖武かといふにや

万葉 吉野の宮ハ天武持統よりのこと

もののふの八十氏人も

此義の八十伴男と同

京家 こゝやこれ家持

乃家宮なるべし

為贈京家願真珠歌一首并短歌

十四日依興作　五月

大伴宿祢家持

4101

すゞのあまのおきつみかみにいわたりて　珠洲乃安麻

かづきとるといふあはびたまいほちも　伊保知毛

がもはしきよしつまのみことのころ　我母　許呂

もでのわかれし時よぬばたまの夜　毛泥　和可礼之時等吉欲

床かたさりあさねがみかきもけづら　安佐祢我美

ずいでゝこし月日よみつゝなげく

らん心なぐさにほとゝぎすきなく

五月のあやめぐさ花たちばなにぬきま　安夜女具佐

じへかづらにせよとつゝみてやらん　可頭良

すゞのあま 仙田すゞの

うみ 越中国 万葉 海字

おきつみかみ 足安云府の

きいめし万葉 沖は所

神ハ海神の心まて沖

のみかみをいふなるべし

いわたりの いハ助字也

あはびたま 真珠也

いほちも 足安云 五

百千をいふといふ也

はしきよし 汝をといふ

おのことを 語 おと詞

衣のわかれし 家持

越中へおもむける時の別也

夜床かたさり 足安云

同乃かたさる也

反歌

4105 4104 4103 4102

心なぐさよ 一云慰也
よそではさむとはすを
花橘にぬきまじへ 珠を
五月玉にぬきまじへと
しらたまをつゝみて
行へもしらぬなとは 和歌の
字に書 舊本に和してぬ
きなれと
おきつしまはゆきわたり
おもふこゝろにはわたり
てこゆる也ちよは六云之
わぎもこが心慰さむ
それもおもふにつる也
しらたまのいほつどひ
又按云五百集也借
むがしくは願くもある

しらたまをつゝみてやらばあやめぐさ
はなたちばなにあへもぬくがね
おきつしまいゆきわたりてかづくちふ 知布
あはびたまもがつゝみてやらむ
わぎもこがこゝろなぐさにやらんため
おきつしまなるしらたまもがも
しらたまのいほつつどひをてにむすび
おこせんあまはむがしくもあるか

教喩史生尾張少咋歌一首并短歌
五月十五日
守大伴宿祢家持
作之

くるむとゆとは門勤也
教喩史生尾張少咋
史生ハ史尾張ハ氏少咋ハ
名也此人まふる事をふ
拙君よみひ付て故事の
書を云るを家持て
教訓きかゝる事也
七出 婦有七去不須父
無子去 淫泆去 姑舅去
有悪病去 多言去 竊盗去
去
徒一年半 笞杖徒流死
謂之五刑 其一ツ也徒
罪ある者 ある一年
てド役かけるる也
三不去 有三不去有所

七出例云但犯一條即合出之無
七出輙棄者徒一年半。三不去云
雖犯七出不合棄之違者杖一百
唯犯姧悪得棄之両妻例云有妻
更娶者徒一年女家杖一百離之
詔書云愍賜義夫節婦謹案先件
數條立法之基化道之源也然則
義夫之道情存無別一家同財豈
有忘舊愛新之志哉所以綴作數
行之歌令悔棄舊之惑其詞曰

取無所帰不去 與更三年喪不去 前貧賤後富貴不去 これ不去の法
なりむかしより女を去る男ハ刑杖百とし（さめ
両妻例 これをいふく少作をさうし
一家同賤 夫婦の中の
事や
太元貴少彦名の御
ふたはしら天孫降臨ちり
此国を経営なし
給ひしものを云よ
しといへるなり
はすゝめし（ことゝ
かしく勉めしさする
人情の学世の理と
しくさまハ妨ると
世の人のいふるそ
人の為を致し

おかなむちすくなひこなれ
いはきれりし（父母を見れハふらく
めこ（妻子）見れハめくしうつせみの
よにこわりとしるさかいはるる
ものを世の人ハうることそちさ
乃なさなるりかたしこそし
よのなれてあさましな うそ
なまもうちなけきかるり

ちさのなら 春過ま
こもあれて 松の書
乃かうしとりを筆く
あやかそて 哲歎せ
なかはゆくハ河ゑ
こうしへふかくしも かく
のことふさゆるんやとぞ
なそよ世て 哲言
さうかしかして 春を
の花咲しかさ
志けむ時のさうかろ
新葉茂し時の盛
あるそりて 並居て
あけくす あけくし
やしてすん待らん
松の茂をいふす

まくハとこへよかくしもあるめや
天地乃かきりとしよせく すらなうの
さうりも何ろこ 志けむとさこのさう（安良多之家年等吉能 何）
まう波やりて あけりすへもう（許 居）
志うもなりいかんとやこすん（時可毛）
心さふく南の世雪消して 射水（吹 益而）
河流る水のよるへあ水 さふるう（水沫 左夫流）
こふいよの緒のいたりりいくく（兒）
ふかうりわりうりあしいね 那呉（雙坐）
れうみのおきをふかめて さといせる

へやらし珠緒玉なる極
妻に逢ひてはしやる
ぬをさる待らん人の遊
さふる字 遊女の字遊
いつかの見安云いつも句
くりし 細の後ハ訓絶し
さへせる 早く遊
さハ早之 仙說なり
日本紀を移て極女と同
所よ少咋か心を誡し
行をなりしありて所る
しるくかきん遠三
作せて待也ちるの
日本紀の心ハさいわれし遊

きみがこころのすべもすべなさ

佐夫流者遊行女婦之字也

反歌

4107
あをによしならにあるいもがたかだかに
まつらんこころしかにはあらじか

4108
さとひとのみるめはづかし左夫流児さぶるこに
さどはすきみがみやでしりぶり

4109
久礼奈為くれなゐはうつろふものぞつるばみの
なれにしきぬになほしかめやも

里人乃見る目恥し　此歌ハ少咋をあざむきさとせるも
仙臼さともうすとハ早くとふ之みやし出かりとハ我佐家を出て
りし宮みやとハ分こに賞する詞也　去かかすとハ歩くヤリ時尻を振也
王東君とハ少咋を云也　或説家持自称と云ハ非也　君とハ少咋の又說とも云
紅ハうつろふ物ゆゑ仙臼紅をハ新なるに喩ふるにつるばみの衣とハ日本紀よ
いふ紅乃色ハ花やかなれとも早く移ふ橡ハ移ろひやすからぬ衣のものハうつ
ろふことなれともそこなハれすとミふ也

先書不待夫君之喚使
是も史生少咋か右の
乃妻それか吃の喚使を
まうすに遊女に迷ひ
わかるとゆて下りて
るを又仙に案
小ハ家持郷の左史学

4110

先妻不待夫君之喚使自来時作歌

一首　五月十七日作之　大伴宿禰家持

さぶるこがいつきしとのにすずかけぬ
婆由麻久太礼利はゆまくだれりさともとどろに

此歌る史をいて不審しおふ乃もあれなん　教喩史生尾張少咋
とみそし七出例あとりて其丁寧あるといかにつもやとまで住云や
さふるこハいつきし殿よいつきかつて殿合し彼も家に左史家に院
小紀の好れハいつかおいてといし心と同時にけるなれいはゆまつけり

里ともろこしハ彼家乃先書のまゝにいろく書て呼けふのつたふる官使
を官使乃驛路よりのぼるまゝにまうでくるかみねをいまをりて
ハ驛鈴をあづけさせ給ふハ旅ゆくべくもあるねハおほよそ 仙抄云官
使乃行て前する所を驛路と云驛路とハいまちとよむ也左右ち
鈴をもちてかれをきくすがく驛(ゆく)國王七つ乃鈴をもち
て七道へはゆすかハ官使より一つまはりて七つ乃中に一つを
持てゆける鈴これをまかる使ハ名乃驛乃者(インヤク)のよみつつけて
かゝさとひ仕へける 下畧 玉英 養老乃職員令ニ少納言驛と
驛函(カヒ)鈴を進付するよしなりけり又主鈴こそ鈴をたまはりこる處
又さらも飛驛函鈴を出納するよしなり 延喜式云驛鈴傳
符皆納漆簏子主鈴与少納言共預供奉云々 禁秘抄云鈴
後實通後云件鈴大直與物也或六角或八角云々に代々る
なし上古乃驛鈴の
まさかて推量へし
ハけまくもあやよ
垂仁天皇を申し

橘歌一首并短謌 五月
二十三日作之
大伴宿禰家持

かけまくもあやにかしこしすめろき(皇神祖)
の神のおほみ代に(可見 大)田道間守
とこよ(常世)にわたりやほこもちまゐ
でこしときときじく(時支)のかくのこの(香久菓)
み(子)をかしこくものこしたまへれ
くに(國)もせにおひたちさかえ(毛勢)はるされ
ばひこえ(孫枝)いつつほととぎすなく
さつきにははつはなをえだ(延太)にたをりて
をとめらにつとにもやりみしろたへ(古佐礼)
のそでにもこきれかぐはしみ

かけのみかたみよ 天子を
貴みて神とのたまふ
ことかけりとこせり
日本紀六 垂仁 田道間
守至自常世則齎物(モチイタル)
非時(トキジクノ)香菓(カクノコノミ)八竿(ホコ)八縵(カゲ)
焉こ乃橘を云なり
萬葉曰田道間守か昔
新羅王子天日槍(ホコ)乃
四世の孫但馬清彦之
やなとこともおそれし
八竿(ホコ)ハ八竿(サラ)に乗へし
齎物(モチキイテタルモノ)ともいふ
まめてこれはまめとし
とこよのかくのこのみを
非時(トキジク)香菓(カクノコノミ)之木也(トキナラヌ)

万十八廿一

4113　4112

おきてかしみあゆるみは玉にぬきつゝ
てにまきてみれどもあかず 秋づけば
しぐれのあめふり あしひきの やまのこぬれは
くれなゐに にほひちれども たちばなの
なれるそのみは ひたてりに いやみが
ほしく みゆきふる ふゆにいたれば しもおけ
どもそのはもかれず 常磐なす いや
さかはえに しかれこそ 神乃御代より よ
ろしなへ 此橘を ときじくの かくのこのみ
を なづけけらしも。

反歌

橘は花にも実にもみつれども
いやときじくになほしみがほし

庭中花作歌一首并短歌　閏五月二十六日作

大伴宿禰家持

おほきみの とほのみかどと まきたまふ
つかさのまにま みゆきふる こしにくだり
きて あらたまの 年のいつとせ しきたへの
手枕まかず ひもとかず まろねをすれば
いぶせみと こころなぐさに

貫之 … 土産 … 白世 … 仙 … 橘 … 四季 … 山 … 精 … 橘 … 非時香菓 … 橘 … 愛 … 云 … 国 … 極月 …

4116　4115　4114

[illegible]

ゆるなでしこを[illegible]

なでしこをやどにまきおほし（奈泥之故・屋戸）なつのゝのさゆりひきうゑて（佐由利）さく（開）はなをいでみるごとに　なでしこ（那泥之古）がそのはなづまに　さゆりばな（佐由理花）ゆりもあはんと　なぐさむるこゝろしなくは　あまざかるひなに一日もあるべくもあれや

反歌

なでしこがはなみるごとにをとめらがゑまひのにほひおもほゆるかも

さゆりばなゆりもあはん（由利母相等）としたはふるこゝろしなくは今日もへめやも

國掾久米朝臣廣繩以天平二十年附朝集使入京其事畢而天平感寶元年閏五月二十七日還到本任仍長官之舘設詩酒宴樂飲於時主人守大伴宿禰家持作歌一首并短歌

おほきみのまきのまに／＼とりもちて

つかふるくにのとしのうちのことかたね

もちたまほこのみちにいでたち

こころしねらち 朝集
使のしゆうすさうう
けむく（家する也
乃安云こころしね
ちハ綸旨と頭ニ然る
ゑしとかる或説ね
まねわ世と廣縄
うきうかうすし
乃ね日さまねと 乃ね
日へさてしさハ御堂之
よもきかつきさ 蓬ま
ちうことし葛葉と同
さうみつき 酒宴と
異へ他とあい上注
あうひあくれと乃安
云哉い對むゑし

いそねかみやまて野ゆきみやこへは
まねけわうせと行しあのとしはき
かへり月かさね乃ねひさまねみこ示
るうしやすしあうねにあらうさ
すきあく五月乃あやめくさよも
きかつきさうみつき行らひあく
まとハみつ河雪きし 消溢而逝 みちてゆく
あ乃いやましのみこうらあく家
呉江乃すみの根もころま おもひ
むすほれあけきにしあうまつ君か

4118

4117

ナコ
于京旅ひ和もうゑ
ナゴエ
奈呉江乃蓑の擬中
乃あこの書くね云
こいへん諷詞
あうまつ君か来をとうり
廣縄か到来使のす
とりかて過ゆかしすゑ
ふみてふえみて 白ひ
やうふえむし
行くるる 乃安云紀
ちしこ
読当す 常ふれん
面ゆうアとせずてと
いえん諷詞
こうの秋あひなん
おもやかし 對面

ここにかかわすあかつて あの野に
咲
さゆり乃花あえみにかつうり
久そく行くるる今日をはじめて
鏡ありすかくしにねあん おもうえ
アせす

反歌

こうの秋あひあらすにし一日見れハ
おもやかしし みやこうびと
かくきくとうひくるあのとすをもく
後月あはえこひききはーやとし

みしまのえ安芸云子やこ
かつらかけ（？）ひとの京人と
かくはしきみをみよ
すくなくもいかにし
あと云に同しといふに
いにしへよ[illegible]
いにしへゆ[illegible]
おもひこゑききて[illegible]
なれはしこし鳴を[illegible]
てきまてきにけると
為向京　[illegible]
事ありけさる[illegible]
我[illegible]
見まくほり[illegible]
あくはしかつらかけを
みて[illegible]

聞霍公鳥喧作歌一首　大伴宿禰家持

いにしへゆしのひにけれはほとゝきす
なくこゑききてこひしきものを

為向京之時見貴人及相美人飲宴之日述懐儲作歌二首　五月二十八日作

大伴宿禰家持

みまくほりおもひしなへにかつらかけ
香具波之　かくはしきみをあひみつるかも　一云おもほゆるかも
朝参之　まゐりきてきみのすかたを

[illegible]
相美人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]貴人
[illegible]
[illegible]
[illegible]題
儲作と[illegible]
一絶は[illegible]
[illegible]
馬蹄乃[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

みすひさにひなにしすめは
われこひにけり

天平感寶元年閏五月六日以來起小旱百姓田畝稍有凋色至于六月朔日忽見雨雲之氣仍作雲歌一首并短歌一絶
六月一日晩頭作之

大伴宿禰家持

すめろきのしきますくにのあめのした
よものみちにはうまのつめい
つくすきはみふなのへのいはつるまてに

上也孟東舟の泊るよ
やいいそしゆ字之
かへり今れきて
従古今の現之
とうろつきまつる
凡安云萬の許洞とせ之
こちなりひ凡海云作
神の熟名之穡稔農
うとみれいうれをし
あまつみつ天水之義
やまれをり仙田山
乃くりまかきゆる
宛ちをや
みんゆるあまれ白雲
此いとみゆる天白雲之
おきつみやへ仙日新宮

てにいにしへゆいまのをつゝによろつつき（萬調）
まつるつかさとつくりたるその
なりはひをあめふらす日のかさなれは
うゑし田もまきしはたもあさ
ことにしほみかれゆくそをみれは
こゝろをいたみみとりこ（弥騰里兒）のちこふ
かことくあまつみつあふきてそ
まつあしひきのやまのたをりに
このみゆるあまのしらくもわたつ
みのおきつみやへにたちわたりとの
くもりあひてあめもたまはね

反歌

このみゆるくもほひこりてとのくもり
あめもふらぬかこゝろたらひに

賀雨落歌一首　六月四日作
大伴宿祢家持

わかほりしあめはふりきぬかくしあらは
ことあけ（許登安氣世受）せすともとしはさかえん

七夕歌一首并短歌　七月七日仰見天漢作之
大伴宿祢家持

とゝる代文云譬如
竜子始生七日即能
興雲亦能降雨
易云竜吟雲興
ごろゝ　棚曇と同
これみゆるくもほひこりて
仙日くもはひこりて云
くもをひろけて云義
くもりいるとは心を
雨足するなりと云之
わかほりし雨は降きぬ
凡安云わかほりしは我
ほりし也　ことあけさ
のみをと言はけていふ
すもしなきらんと云
日本紀ニ興言ヲ曰ヘタリ

あまてらす神のみよ
天照太神乃御代よ
り牛女の中を隔て
こゝにはあらず只
神代よりと云こ
とをいはんとて天照
す御神より云也
下照姫のおもなる
やすも七夕ことに云々
神代よりのいひ来
袖ふりかはし　あそ
息のをにたなげきつま
子らも
あけぬすとて　七夕を云
そのへゆもい上より云
うながけりゐて　足安

あまてらす神の御代より やすのかはら
なかにへだてゝむかひたちそでふりかはし
いきのをになげかすこら（奈氣加須古良）わたりもり
ふねもまうけずはしだにもわたしてあ
らばそのへゆもいゆきわたらし
たづさはりうながけりゐておもほし
きこともかたらひなぐさむる
こゝろはあらんをなにしかもあきにしあら
ねばこととひのともしきこら
うつせみの世の人われもこゝをしも

云うながけは頸かけて　肩
に纏頭之
こゝろひのことしさ
由信義なる牛女之
ころもこそよし
しばらくとこ云て
あやにくすしみ　乃安云
あやにくしきこと
ひつぎにすれ　云を
通て牛女の纏ふる中
と云續（ツギ）續（ツグ）に之
あまのかは橋渡せらば
よく小舟もあらねば
この同の足さす舟を
わたしてわたり
橋も舟もよみ入く

あやにくすしみゆきかはるとしのはごとに
あまのはらふりさけ見つゝいひつぎにすれ

反歌

あまのかははしわたせらばそのへゆも
いわたらさんをあきにあらずとも
やすのかはいむかひたちてとしのこひ
けながきこらがつまどひのよぞ

來贈戯歌四首 返報歌者
脱漏不得探求也

越前國掾大伴宿祢池主

あしともよむ風情
よらわよむへしさら仙
やすの川にむかひつゝ
やすの河ハて河と云
こむかひつてハ来
向ふ意しらての意八よ
守連て踏く牛女
乃まらふしるゝ之
忽辱恩賜　家持によ
る書信するしあるも

忽辱恩賜驚欣已深心中含咲獨
座稍開表裏不同相違何異推量
所由率尓作策歟明知加言豈有
他意乎凡貿易本物其罪不輕
正贓倍贓宜急并滿令勸風雲
發遣徴使早速返報不須延回
勝寶元年十一月十二日物所貿易下吏
謹訴　貿易人断官司　廳下
別日可怜之意不能黙止聊述四詠
准擬睡覺

貿　玉篇云侯切市賣
正贓倍贓　王云贓子ヤ切
貨也　正贓倍贓　玉云
贓作郎切藏也

4128 4129 4130 4131

ときすてゝひの緒
擬羅乃ふ自由を拡
係て針を多つまり
縫物にしつる之
はりぶくろあけおく
乃安云ひきりへいこ
いおきてし玉案置
奴へいこ之乃安云を
らはおのやい己ども
裏を付しりしと意
とかく縫ひつけ
乃安云わひつけ
針袋を頭より之
仙日てゝさひおけ
こていてこめき歩く
ゝ人ゝしこのめすへお

くさまくらたびのおきなとおもはれて（於佐奈）
（波里）ぞたまへるぬはんものもり
はりふくろとりあけまへにおきかへさへ（芳理夫久路）
おのともおのやうらもつきたり
はりふくろおびつゝけなからさとことに（比等）
てらさひあるけとひともとかめす
（等里安豆麻）とりかなくあつまをさしてふさへしに
ゆかんとおもへとよしもさねなし

更來贈歌二首

大伴宿禰池主

れハいかなるとりの人をとか
まうてし或説等(?)叶
ありちまくおふかを(かりく)
國のなき人ままゆんと
さなと誤か卑すとし
部下 紀ふ之加賀郡
いわかなとの事也 射水
隷中也
身異胡馬 文選廿九
古詩曰胡馬依北風
越鳥巣南枝註皆思
舊國

依迎驛使事今月十五月到來部
下加賀郡境面蔭見射水之郷戀
緒結深海之村身異胡馬心悲北
風乗月徘徊曾無所爲稍開來
封其辭云著者先所奉書返畏
度疑歟僕作囑羅且惱使君夫
乞水得酒從來能口論時合理
何題強吏乎尋誦針袋詠詞泉
酌不竭抱膝獨咲能蠲旅愁陶
然遣日何慮何思短筆不宜

勝寶元年十二月十五日　徴物下司
謹上　不伏使君記室

4132
たゝさにもかにもよこさもやつこそ
あれハありけるぬしのとのとに

4133
はりふくろこれハたまはりぬすりふくろ
いまハえてしかおきなさびせん

たゝさにもかにもよこさも
兄安云たてさハたて
さまにかにもハかくさまに
よこさハよこさまに
奴茶やつこを何迷ハ
たゝるとハ堅(タテ)さまに
ことにとにさかしきは
もろ〳〵も我ハ君乃
奴なりて何ゆゑをと
ぬしのとのとにハ主君の
殿の戸に 日本紀五 崇神天皇紀 諸大夫等の歌 みまきそのとに 上田名公詞
はりふくろこれハ 此哥ハおくりたる針袋ハたまはりて
ぬすまんとよりことよせて心をこめ針袋ハいかにもすり袋を今ハ
えてしかなと風流をまじへて翁さびハ翁されたるなる
このハ伊勢物語の注にさかすり袋ハすきふくろと音通すと
若紫巻河海抄にはかり袋ハすき袋ハ遣する袋のよし

4134　4135　4136　4137

雪の上ふてれるつくよ
にくよふ月花をえ
しきいよしきむすめ
る詞しきもこかか
もこハよき人ぶ
をし或ハ義女と云
わかせこクこそ云る
わかせこハ秦伊美吉を
いふ宴にひき琴
とりてうたしかや
琴六絃をさす
ことをく家持節をき
のかやまもしふ心
まもえ安云いやせ
さいハやすきわし
文選嵆叔夜琴賦曰

宴席詠雪月梅花歌一首　十二月作之
大伴宿禰家持
ゆきのうへにてれるつくよにうめのはな
をりてをくらんはしきこもかも

少目秦伊美吉石竹舘宴時歌一首
守大伴宿禰家持
わかせこかこととるなへにつねひとの
いふなけきしもいやしきますも

天平勝寳二年正月二日於國廳給饗諸郡司等宴歌一首
守大伴宿禰家持
あしひきのやまのこぬれのほよとりて
かさしつらくはちとせほくとそ

判官久米朝臣廣縄之舘宴歌一首　正月五日作
大伴宿禰家持
むつきたつはるのはしめにかくしつつ
あひしゑみてはときしけめやも

縁檢察墾田地事宿礪波郡主帳多治比部北里之家于時忽起風雨不得辭去作歌一首　二月十八日作之

懐戚者聞之莫不憯懍慘悽愀愴傷心
ほとの葉下
まも根の越のるえ
河ひきれ山の
仙留にやま六本あられ
なまか師説かやと
寄生そし本の枝り
こと葛ちしまとをれ
やとりかすかさし
たしくいとかさつ
〔くハし〕袖中抄二千家
祝ともふ哥とを
むれさつまる物
河ひしえてハ
とかく宴會さへをを

笑てとこしときしけ、　守大伴宿祢家持
めやこきちてゐとそ　やふなみのさとにやとかりはるさめに
非時(トキジク)ハときハにれね　夜夫奈美
みと云之童蒙抄云　こもりつゝむといもにつけつや
かひしえみくハと
ハすれ姫めまハきてしまへ今ハ必あひ見てとく恨なし
礼つゝとしハけめとハ実ハつめとしりて童蒙の本ハ
としハけめと行るゆへ(めき)誤せしならやされハこゝにしめ置し
とりよめくともすゝへめやとしよみえるくまり
撿察墾田地事　墾ハあらきはりといふ新ニ田地を開くをいふ
けるの撿察して田風ニ[illegible]撿せす小里の家小宿りしを
やふなみのさとに　夜丈奈(コモリ)隠乃里ハ越中し小里の里ある
へしこもりつゝむとハ雨隠してしかるゆへ[illegible]
こゝも同

萬葉集巻第十八終

貞享三年七月十三日書于新玉津嶋神前　墨付卅一枚 [illegible]

万十八　卅一終